

子母澤寛と三岸好太郎 異能のふたりーその交錯する生涯

2018/06/24

年齢	子母澤寛(梅谷松太郎)	三岸好太郎	年齢
0	1892(明治25) 2月1日、北海道厚田郡厚田村大字厚田16番地に生れた。本名梅谷松太郎。父伊平、母石(イシ)とは縁がうすく、生後まもなく、祖父十次郎、祖母スナのもとに引きとられて養育された		
1	1893		
2	1894(明治27) 日清戦争~05		
	1899(明治32) 5月23日、三岸イシが七飯村から厚田村に戸籍を移す。同時に、梅谷十次郎・スナの長男として梅谷松太郎の出生届が7年遅れて出される		
11	1903(明治36) 厚田小学校尋常科四年卒業後、札幌にて陸軍地方幼年学校を受験したが、水泳好きのため慢性中耳炎を患い、その後遺症による右耳不聴で身体検査ではねられた	4月18日、北海道札幌区南7条西4丁目に生まれる。本籍地：北海道厚田郡厚田村大字厚田16番地。父：橘巖松、母：三岸イシ、妹：千代。祖父梅谷十次郎が母の結婚を許さなかったため、三岸姓を名乗る	0
12	1904(明治37) 日露戦争~05		1
13	1905(明治38)		2
14	1906		3
15	1907(明治40) 厚田小学校高等科四年卒業。函館の庁立商業学校入学。学費は祖父の十次郎が金剛の懐中時計を入質し捻出してくれた。札幌の実母に金策を頼んだのだった。8月25日の大火で商業学校を焼かれ、家庭の事情もあって商業学校中退		4
16	1908(明治41) 3月2日、祖母のスナが肺結核で死去。私立小樽商業学校(現在、北照高校)に転校後、更に札幌の北海中学に移った。このころ、祖父・十次郎、厚田村を夜逃げて札幌のイシのところへ転がり込むが、ゴミ扱いされ中島公園近くの元馬小屋に住む	母・イシを頼って来宅した祖父・梅谷十次郎、異父兄・梅谷松太郎(子母澤寛)と初対面か。	5
17	1909	4月、札幌区立西創成尋常高等小学校に満5歳で入学	6
18	1910		7
19	1911 3月18日、祖父の十次郎、肺炎で死亡。葬式を義父・巖松に出してもらう。この年、北海中学卒業後上京して、義父・巖松の助力で明治大学法学部(独法)に入学	4月、同区南5条西2丁目に転居し、札幌区立豊水尋常高等小学校に転校	8
20	1912	4月、同区北7条西5丁目に転居し、札幌区立北九条尋常高等小学校に転校	9
21	1913		10
22	1914(大正3) 第一次世界大戦 明治大学法学部卒業、刑事政策を一年ほど研究した。この間、アルバイトのため横須賀の地方紙編集に従事したが、弁護士試験に失敗		11
23	1915 横須賀の地方新聞社がつぶれ、札幌に戻り、義父・巖松を頼る。日刊紙の釧路毎日新聞社に就職するが将来性を危惧して退社。巖松の縁で札幌木材株式会社に入社。この年、大川タマと結婚	4月、北海道庁立札幌第一中学校(札幌南高等学校)に入学	12
24	1916 1月1日、長女てるよ誕生。義父の巖松は長い病気をやって病院で亡くなる。イシが質屋で働いているため、三岸好太郎、加代を米1俵をもらって下宿させる	父巖松49歳で死亡。住込奉公の母イシの仕送りを受けて、一時兄梅谷(子母澤寛)宅に下宿。学籍簿によると、子母澤寛の住所は北9条西8丁目となっているという。北大構内? ついで北7条西8丁目の塩野谷平蔵宅に下宿	13
25	1917(大正6) ロシア革命 網走にて、「羊蹄蕃に触るるの形」と易が出る。原木買い付けの失敗を契機に木材会社を退いた		14
26	1918 6月19日、次女のさゆり誕生。妻子と共に上京、小石川諏訪町に住む。銀座の朝ノ気商会勤務するが倒産。読売新聞社入社。住いは北千住中組四十六番地の裏長屋の2階だった	北17条西5丁目の田名菊次郎方に下宿をかわる。油絵に興味を抱き、中学の美術クラブ露会に属し、林竹治郎の指導を受ける	15
27	1919	3月、学業不振のため落第。11月、俣野第四郎、戸村真次郎ら一中生とアネモネ画会をつくる	16
28	1920 梅谷緑の筆名で読み物作品を執筆。梅谷孫吾名義でも執筆	6月、修学旅行中喫煙が見つかり停学処分を受ける	17
29	1921 3月18日、長男の龍一生まれる	3月、札幌第一中学卒業。東京美術学校建築科(図案科第二部)に入学の親友俣野第四郎と上京する。一雑司ヶ谷の俣野第三郎(第四郎の兄)方、北千住中組46番地の兄梅谷松太郎方、北豊島郡巢鴨1142番地の日本画家大野麦風方、西巢鴨向原3476番地の八代忠方ほかに下宿し、新聞配達、夜なきそば売り、大野麦風の書生などをへて、下谷郵便局の臨時雇いになる	18
30	1922	吉田節子と知りあう	19
31	1923(大正12) 9月関東大震災 5月24日、次男弘二誕生。大森新井宿西沼に移転。新選組関係史料をさぐる一方、旧幕時代の遺老による実証談を聞き書き	5月、春陽会第1回展で〈檸檬持てる少女〉入選。7月、俣野第四郎、小林喜一郎と札幌へ帰り、三人展開催。8月、札幌から帰京。西巢鴨宮仲2278番地の南大画家の離れに引っ越す。8月、母と妹が上京して同居。9月、関東大震災起き、大森の兄子母澤寛を見舞う途中に吉田節子に接近する	20
32	1924 千葉亀雄の着想で映画女優の評判記といった「囲みもの」記事を執筆する	3月、春陽会第2回展に子母澤寛と娘てるよをモデルにした〈兄及彼ノ長女〉(春ノ野辺)〈友人ノ肖像〉〈崖ノ風景〉が入選、春陽会賞を首席受賞。9月、吉田節子と所帯をもち、巢鴨染井墓地のそばの下宿の2階を借りて生活を始める(届出は翌年4月)。11月、札幌から上京した中学の先輩山田正と高田町に家をかきり	21
33	1925 5月22日、三男第伍生まれる。国定忠治七十五年祭の取材のため、上州国定村に出張	1月、長女陽子が生まれる。冬と5月に節子夫人の実家(愛知県起町)に滞在。6月、板橋町中丸に引っ越す。8月、丹羽秀雄と札幌へ帰り、「丹羽秀雄・吉田節子・三岸好太郎展覧会」開催。9月、前住所のやや奥手に引っ越す。10月、北海道美術協会特別会員となり、第1回道展に〈初秋風景〉出品	22

34	1926 (大正15/昭和元)	2月、東京日日新聞社入社、社会部の遊軍となる。この頃より小笠原長生子爵と親交	3月、春陽会無鑑査に推薦される。9月、同郷の画友岡田七蔵と中国旅行。上海、杭州、蘇州などを訪れる(12月まで)	23
35	1927	8月から10月、聞き書きを主とした「味覚極楽」連載	西菓鴨町大字巢鴨2280番地の借家に移転。母、妹とともに住む。4、5月、親友であった故・俣野第四郎の遺作展を東京と札幌で開催。夏、節子夫人と岐阜で過ごす。晩秋も岐阜に行く	24
36	1928 (昭和3) 3・15事件 戊辰戦争60年	5月に東京日日新聞社社会部編として『戊辰物語』を出版。それまでの新選組調査を『新選組始末記』として万里間から出版。筆名は子母澤寛	3月、次女杏子が生まれる。初夏、島海青児、森田勝、節子夫人と札幌に帰り、北8条西4丁目の大森滋宅隣家に秋まで滞在	25
37	1929		5月、中野区鷺宮5丁目407番地にアトリエ付の住宅を建てる	26
38	1930	股旅もののに新機軸を画した作品、「笹川の繁蔵」を「サンデー毎日」に発表。3月、三岸好太郎の装丁による単行本刊行	3月、子母澤寛著『笹川の繁蔵』、本田一郎著『仕立屋銀次』が、三岸の装幀・挿絵により塩川書房より刊行。9月、長男寅太郎生まれる。11月、独立美術協会の創立に加わり、最年少の会員となる	27
39	1931	子供の入院、手術費を捻出するため、1月、「紋三郎の秀」を「サンデー毎日」に発表	1月、独立美術協会第1回展に〈マリオネット〉〈馬に乗る道化〉〈少女〉〈レビューの男〉など出品。独立展の大阪展その他地方展で各地に行き、講演も行う	28
40	1932	11月から翌年6月にかけて、最初の新聞小説であり、それまでの股旅ものの決定版として定評のある「国定忠治」を発表	8月、札幌に帰る。(11月帰京) 9月、北海道美術協会後援の美術講演会で「新興芸術運動」の演題で講演。個展(豊平館)開催。10月、同郷のオリンピック三段跳び優勝者南部忠平を讃える〈南部の跳躍〉を制作し、札幌市に寄贈	29
41	1933	「国定忠治」の執筆終了後の10月、新聞社を退き、創作に専念	1月、総合美術展覧会に〈海〉を出品。「独立美術4」(三岸好太郎特集、建設社)刊行。3月、独立美術協会第3回展に〈乳首〉〈花〉(新交響楽団)〈ダイナミック蝶〉〈オーケストラ〉出品。作風が前衛風に大きく転換する。6月、北海道新興工芸美術連盟主催の第1回試作展に節子夫人と共作の状差し〈豚小屋〉ほか30点を出品。小山昇、植木茂ら北海道出身の独立展出品作家10名による北海道独立美術作家協会の結成に指導者的立場で参画。7月北海道独立美術作家協会第1回展に〈金魚〉〈見物客〉を賛助出品	30
42	1934 (昭和9)	3月から「突っかけ侍」、さらに10月より「松村金太郎」を「都新聞」に連載。股旅ものから次第に維新ものへと回帰しはじめる。7月2日、異父弟の画家三岸好太郎が名古屋で死去。葬儀のために駆けつける。「北海道倶楽部」8月号で小学校時代の恩師で北海道タイムス記者の河合操石(「ルーラン」の伝道者)が子母澤寛との往復随想「村を出た子母澤さんへ」で三岸好太郎に2年前に札幌で合ったこと、北海道タイムスに三岸の死亡記事を書いたことなどを記す	独立美術協会第4回展に〈旅愁〉〈ピロードと蝶〉〈飛ぶ蝶〉〈海洋を渡る蝶〉〈海と射光〉〈貝殻〉〈のんびり貝〉出品。凸版印刷素描10点を収めた筆彩素描集「蝶と貝殻」(限定100部)刊行。新しいアトリエの建築を思い立ち、友人の建築家山脇巖に設計を依頼する。6月、独立美術協会会員小作品展に出品。「貝殻旅行」と称して節子夫人と京都、奈良、大阪に遊ぶ。帰路名古屋に立ち寄り、節子夫人は帰京。北海道独立美術作家協会第2回展〈ピロードと蝶〉出品。28日、名古屋の銭屋旅館で胃潰瘍の吐血でたおれる。7月1日、心臓発作で死去、31歳。	31
43	1935	「あばれ行燈」発表。単なるやくざ礼賛にあらず、法に庇護されない庶民の抵抗を背後に秘めた股旅ものの質的転換を示す	3月、三岸好太郎画伯遺作回顧展	
44	1936	6月、新井宿から山王1の2611に移転、この頃の新聞のゴシップ欄によれば、月産350枚を下らない作家に数えられている		
	1937 (昭和12)	8月22日、三岸イシ死去。63歳		
48	1940	5月、『大道』をはじめとして『勝安房守』にいたるまで多くの作品が大道書房から刊行。経営者は同郷の戸田城聖		
49	1941	10月より1946年の暮にかけて大長編「勝安房守」(後に「勝海舟」に改題)を「中外商業新報」(後の「日本経済新聞」)に連載		
53	1945 (昭和20) 終戦	終戦に先だつ二个月前に山王より鶴沼堀川の別荘に移転した		
56	1948	この年、さらに藤沢市鶴沼海岸6350に移転した		
60	1952	1月から6月にかけて白浪ものの代表作であり、自作のうち最も愛着を抱いた「すっ飛び鴉」を「読売新聞」に連載		
63	1955	5月から翌年8月にわたり、勝小吉と麟太郎父子の交渉を成長小説風にとどり、一種のビルドアップ・ロマンスとして結晶せしめた「父子鷹」を「読売新聞」に連載、6月より翌年1月にかけて、三代にわたるお猿の「三ちゃん」や犬、カラスなどによせる愛情を描いた好随筆、「おしゃべり籠・愛猿記」を「銀座百点」に連載		
69	1961	1月から翌年12月にかけて「二丁目の角の物語」を「銀座百点」に連載。「座頭市物語」が勝新太郎主演で映画化		
70	1962	2月、第十回菊池寛賞が『逃げ水』『父子鷹』『おとこ鷹』など幕末維新を背景にした一連の作品に与えられた		
71	1963			
72	1964	11月から翌月にかけ、「曲りかど人生」を「読売新聞」に連載		
73	1965			
74	1966 (昭和41) 北海道文学展	11月11日、妻タマが脳血栓のため死去		
75	1967 (昭和42) 北海道文学館創立	榎本武揚を主人公にした「行きききて峠あり」を「週刊読売」に連載。最後の長編	9月、節子夫人ら遺族4名により三岸好太郎の遺作220点が北海道に寄贈され北海道立美術館(三岸好太郎記念室)が開館	
76	1968 (昭和43)	7月19日、心筋梗塞のため鶴沼の自宅で死去。戒名は「慧光院文宗日寛居士」。墓地は鎌倉霊園。76歳		
	1973	『子母澤寛全集』(全25巻)が講談社から刊行		
	1974 (昭和49)	厚田村に子母澤寛文学碑が建立される		
	1977 (昭和52)		6月、北海道立美術館を北海道立三岸好太郎美術館と改称	
	2018 (平成30)	北海道立文学館で特別展「没後50年 子母澤寛 無頼三代 蝦夷の夢」開催。子母澤寛と三岸好太郎の業績を紹介		

* 子母澤寛年譜は尾崎秀樹氏研究、三岸好太郎年譜は道立三岸好太郎美術館HPを参照し、谷口孝男が加筆削除して構成した